

中部接骨学会事務局便り

「食事は早く綺麗に食べなさい。そういう人間は、それなりに仕事も早く正確に出来る。」と父・伯父から教えられて育った。若い頃は、とにかく親から言われると逆らいたくなるものである。しかし、時を経て柔道整復師の養成学校を卒業し、研修した現場でも「3分で3杯の飯を食え！」と今度は先輩達から教えられた。「社会に出て、悔しいけどやはり同じなんだ。」と思い、その悔しさを胸中に押し込め、無理矢理飲み込み、努力を繰り返した。

しかし改めて考えると、目の前に置いた食事を3分で腹に押し込める為には、まず①口に物を運ぶ順番を決定し、食べ上げるまでの過程を想定しなければならない。そして②行動(=食べる)に移る。ただ食べるのではなく「人様の前で恥を搔くことの無きように」と幼少期より祖母・母親に躰けられた事を思い出しながら正しい箸の持ち方で、綺麗に、音をたてず、溢さずに箸を口へ運ぶ。そして③食べ終わったら直ぐ綺麗に食器を片づけ、足早にその場を離れる。食事をしつつも寸暇を惜しみ、周囲を気にし、次やるべき事を考えながら遂行したのが「食事」であった。私一人でなく、おそらく皆が通ってきた道であろう。

ある時、先輩のA先生と私は本学会業務の進行状況の報告・承認・署名を頂く為、中部接骨学会二代目会長の米田達也先生がおられた名古屋駅前の豊田ビル(現:ミッドランド・スクエア)へ伺った。まず①車を路上のコインパーキングに駐車し、②正装に身を纏い、オフィスビルの階段を品良く、素早く駆け上がり診療所へ向かい、③米田達也先生への書類説明を行い、署名を頂戴し、④近況報告・世間話しと続き終了した。足早に階段を降りつつ「杉浦、飯は?」「まだです。先生は?」「地下にランチあるだろ? 行くぞ。」「は

い。」この短い会話中に、既に定食屋の暖簾をくぐり抜けていた。食事が終わり、また足早に車の駐車してあるコインパーキングへ向かった。駐車料金の精算時に「先生、やばいです。20分しか経っていません! 僕たち変態ですね。」「…(先輩:苦笑い)」。私はこれが同じ釜の飯を食ったという証であると理解し、尊敬する先輩と同じ行動がとれたことが、ちょっぴり嬉しかったことを思い出す。口も聞いてもらえなかった憧れの先輩と行動を共にし、直立不動でしか挨拶を交わせなかった雲の上の存在の方と話が出来ようになったのは、全て何年もの積み重ねの賜であると確信している。

ここで皆さんに理解して頂きたいのは、雲の上の存在の方に対して、この数分間の為に如何に上手く・素早く、御手間を取らせず、どんな質問をされても返答可能なようにと準備することの必要性和必然性を。そして日々の業務を遂行しつつ、数日前から資料を準備し、順番やシナリオを考え、特に私は話ベタであった為、加えて前日からしゃべり言葉で会話の練習を何度も繰り返してきた行為全てが、数分間の出来事に集約されているという事実を。それは現会長である米田實先生、副会長の米田忠正先生に対しても、勿論同じである。

その昔、「今、これをやっているから、それは出来ません。無理です。」という言葉は存在しなかった。人に出来ることは、夜を徹してもきっと自分も出来ると。特に上から言われたことは絶対である。頭の後に目をつけてアンテナを張り巡らし、寸暇を惜しんで努力する。そうした我々の辿ってきた道程の中で、目配り・気配りを身につけつつ技術・知識を会得し、柔道を教授された者だからこそ病める人を自らの身体で受け止めて、いかなる苦境にも「柔道整復師道」を以って、先人達

は乗り越えてきた。たった3年の学習で人の身体を守る「聖職の末端」に位置付けてもらえるのだから…。目先の容易な民間療法的に偏ることなく、生涯学習は勿論のこと、他業種よりも人間形成に努力を惜しまず己を磨いてきた。そしてそれらの全ての努力が実となり、各々の柔道整復師像を創り上げ、多くの国民（患者様）に支持され、今日に至っているのである。

自由・平等という綺麗な言葉の下、柔道整復師養成学校が乱立し、どんな家庭教育・学校教育を受けても、どんな思想・どんな社会的背景を持ち備えていても、「国民皆保険制度」の下で健康保険証の提示・閲覧・使用を許可され、本来だと聖職にならなければならないはずの「柔道整復師」への道がここ十数年で無秩序に開かれてしまった。その結果、猫も杓子も柔道整復師となり、「犬も歩けば接骨院に当たる。」という始末。さらに質が悪くことに、本当に柔道整復師のやるべきことに憧れ抱きなるべくしてなった者より、他の社会に嫌気がさし、別の道として柔道整復師を選択した者ほど先人の背中に舌を出し、利己主義的に上手に立ち振る舞う。先人達が築

き上げた「柔道整復師道」を異色文化のように批判するばかりか「柔道整復術」までも次世代へ伝授しようとせず崩壊へと導く。それらの出現を妨げること、または早急に排除することを要すと考えるのは、私だけであろうか？

本会創設者である米田一平先生は「この名古屋・枇杷島・中部接骨学会が日本柔道整復術の大本山だ。覚えとけ！ 独り立ちしても俺が来いと言ったらすぐ飛んで来い。お前達はそれぞれ地元に戻っても何も恐れることはない！」と幾度となくおっしゃられた。この言葉を胸に刻み、我々は柔道整復師という身分で医科と病める人々との狭間で頭^{こうべ}を垂れ、じっと我慢を繰り返し、気を遣いつつ、切磋琢磨して得た技術・知識への「道程」を、我々は今後、後進へ伝授することも無く終わる、または否定・封印しなければいけない時が来ることを案じて止まない。

中部接骨学会・事務局
杉浦 光幸